

# Milton Never “Ate”

— 『楽園喪失』のブランク・ヴァース再考—<sup>1</sup>

川 島 伸 博

## ▶ キーワード

ジョン・ミルトン、ジョナサン・スウィフト、  
リチャード・ベントレイ、エドワード・フィリップス、  
ベン・ジョンソン、リチャード・ホッジズ、書物史、  
編集史、『楽園喪失』、韻律論、綴りの近代化

## ▼ 要 旨

1667年8月20日にサミュエル・シモンズによって書籍出版業組合に登録された『楽園喪失』(*Paradise Lost*)はその秋ごろに初めて出版されたと考えられている。この初版には異なる表紙が六種類確認されているが、シモンズが自分の名前を印刷者として表記するのは1668年の四つ目の表紙以降のことである。さらにこのヴァージョン以降、本文の前に「印刷者から読者へ」(*The Printer to The Reader*)、ミルトンによる巻ごとの「梗概」(*The Argument*)と「韻律論」(*The Verse*)と正誤表(*Errata*)が追加される。この変更の背後には、なんらかの事情の変化があったに違いないのだが、推測の域を出ない。確実なのは、読者の便宜のために追加されたはずのこの「梗概」と「韻律論」が、皮肉にもこの叙事詩の読みを制約していったという事実である。本論は、1667年の最初のヴァージョンに戻ることで、ミルトンの「韻律論」とそれに基づく脚韻廃止論者としてのミルトン像の束縛から自由になることを提唱する。そして、その立場から、『楽園喪失』初版のテキストに存在する、我々が見逃してきた30を超えるヒロイック・カプレット、特に、第八巻(1674年版以降では第九巻)でイブが禁断の実を口にす、まさにその瞬間に生じる脚韻について考察していく。

## スウィフトの翼に乗って

『楽園喪失』(Paradise Lost) 初版が出版された1667年にダブリンで生を受けたジョナサン・スウィフト(Jonathan Swift, 1667-1745)は、『ガリヴァー旅行記』(Gulliver's Travels, 1726)の成功で作家としての名声を確立した後、1732年に興味深いパンフレットを出版する。「ミルトン復位とベントレイ退位」(“Milton Restor'd and Bentley Depos'd”)と名付けられたその小冊子は、同じ年に出版された彼の宿敵リチャード・ベントレイ(Richard Bentley, 1662-1742)の編集による『楽園喪失』のテキストを酷評するものである<sup>2</sup>。スウィフトはまず、ベントレイの序文の間違いをあげつらい、次に彼がこの叙事詩第一巻に施した修正を一つひとつ検証し、難癖をつける。そして最後に、ベントレイ版に対抗するべく、新たに書き直された『楽園喪失』の冒頭を誇らしげに提示する。

Of Man's first Breach of the Divine Decree,  
And the fair Fruit of that forbidden Tree,  
Whose mortal Taste the World's great Ruin wrought,  
And Sin and Death, and loss of *Eden* brought;  
Till Sin and Death one greater Man defeat,  
Restore us, and regain the blissful Seat... (Swift, 29)

ジョン・ミルトン(John Milton, 1608-74)の代名詞とされる無韻詩(ブランク・ヴァース)を台無しにするこの書き換えは、今から振り返ると、スウィフトが批判するベントレイの「改竄」以上の冒涇にしか思えない。しかし、スウィフトはこの書き換えを『楽園喪失』唯一の欠陥である「脚韻の不在」を解消する行為として称讃する<sup>3</sup>。スウィフトは、この小冊子の表紙に『楽園喪失』の詩句をもじり、“Sing Heav'nly Muse, from Pedantry be free”というエピグラフを掲げているが、本論も、1667年の初版に立ち返ることで、『楽園喪失』の韻文に関する神話から「自由」になることを提唱する。そして、その自由な視点から、初版のテキストを読み直し、スウィフトが唯一の欠点として嘆く、この詩の脚韻欠落問題についても再考していく。

初版のテキストを読んでいく上で重要な仮説は、他ならずスウィフトが酷評したベントレイによって示される。彼は『楽園喪失』のテキストに手を加える理由を次のように説明する。

*Our celebrated Author; when he compos'd this Poem, being... blind with a Gutta Serena, could only dictate his Verses to be writ by another. Whence it necessarily follows, That any Errors in Spelling, Pointing, nay even in whole Words of a like or near Sound in Pronunciation, are not to be charg'd upon the Poet, but on the Amanuensis.*

*The Faults therefore in Orthography, Distinction by Points, and Capital Letters, all which swarm in the prior Editions, are here very carefully, and it's hop'd, judiciously corrected...* (Bentley, “The Preface”)

『樂園喪失』執筆時に詩人が盲目であったこと、そしてそれゆえに綴りや句読点等に責任を持てなかったという見方には、ある一定の説得力がある。しかし、その「書記生」のひとりであった詩人の甥エドワード・フィリップス (Edward Phillips, 1630-c.1696) は、ミルトンがこの叙事詩の執筆時に、綴りや句読点にまで気をつけていたことを証言する。

I had the perusal of it from the very beginning; for some years, as I went from time to time, to Visit him, in a Parcel of Ten, Twenty, or Thirty Verses at a Time, which being Written by whatever hand came next, might possibly want Correction as to the Orthography and Pointing. (Phillips, "The Life of Mr. John Milton", xxxvi)

ヘレン・ダービシャ (Helen Darbishire) など二十世紀前半の新書誌学<sup>4</sup>の流れを汲む編集者は、この証言などを根拠に、ミルトン生存中に出版されたテキストには、綴りに至るまで作者の意図が反映していると考えていたが、文献学の研究が進む中で「ミルトン特有の綴り」という考えは虚構に過ぎないと批判されるに至った。これに伴い、アラステア・ファウラ (Alastair Fowler) など1960年代後半以降の編集者は、ミルトンの綴りには意味はないと切り捨て、『樂園喪失』の綴りの近代化を推し進めた。しかし、最近、出版史の研究が進み、書籍商、出版者、印刷者、植字工、検閲者の役割が見直される過程で、スティーヴン・ドブランスキ (Stephen Dobranski) が、ミルトン存命中のテキストを、詩人と出版関係者との共同作業として捉え直し、その綴りに詩人の意図が反映している可能性を再び主張している<sup>5</sup>。

## 1668年、韻律論の呪縛

サミュエル・シモンズ (Samuel Simmons, 1640-1687) によって1667年に出版された『樂園喪失』初版が、その後のテキストと決定的に異なるのは、十巻構成であること、そして梗概と韻律についての注意書きが欠けていることであろう。ここで注目すべきは、1668年の初版第四刷に、シモンズの依頼によって追加される「韻文論」("The Verse") である<sup>6</sup>。

The Measure is *English* Heroic Verse without Rime, as that of *Homer* in *Greek*, and of *Virgil* in *Latin*; Rime being no necessary Adjunct or true Ornament of Poem or good Verse, in longer Works especially, but the Invention of a barbarous Age, to set off wretched matter and lame Meetre... This neglect then of Rime so little is to be taken for a defect, though it may seem so perhaps to vulgar Readers, that it rather is to be esteem'd as an example set, the first in *English*, of ancient liberty recover'd to Heroic Poem from the troublesom and modern bondage of Rimeing. (Milton, "The Verse")

脚韻は野蛮時代に発明された厄介な束縛であり、この詩が脚韻を用いていないことは欠点にはならないとミルトンは弁明する。この高らかな脚韻廃止論は、スウィフトの例が示すように、なかなか受け入れられなかったが、英文学史が確立していく中で、ミルトンは脚韻からの解放者として祭り上げられ、ミルトンといえばブランク・ヴァースという図式ができあがっていく。

たとえば、ミルトンの韻文を論じるジョン・クリーザ（John Creaser）の言葉は典型である。

*Paradise Lost* is, then, the epic of free will and liberty of conscience, and Milton creates the profoundly apt medium for it. Whereas the shaping of rhyme reinforces a sense of destiny, Milton develops an unprecedented mode at once disciplined and unpredictably open-ended... Milton is rejecting not simply rhyme but the restoration norm of closure.

(Creaser, 111-3)

ミルトンの韻文論を敷衍し、彼の「自由意志」を体現する媒体としてブランク・ヴァースを評価するこの見方は正しい。しかし、このようにミルトンを脚韻からの解放者とする見方は、ある事実から我々の目を背けさせてきたのである。

今ではあまり顧みられることのない論文でジョン・ディーコフ（John Diekhoff）は、この叙事詩にヒロイック・カプレットが17か所も存在することを指摘している<sup>7</sup>。さらに、ディーコフは脚韻としてカウントしていないが、以下のような行末の同語反復も17か所存在する<sup>8</sup>。

...gladly then he mixt

Among those friendly Powers who him receav'd

With joy and acclamations loud, that one

That of so many Myriads fall'n, yet one

Returned not lost:

(VI, 21-25)<sup>9</sup>

この行末における反復を脚韻としてカウントするのであれば、その箇所は34か所にも及ぶ。にもかかわらず、我々の多くは、『楽園喪失』には脚韻がない、もしくは、あってはならないと思いついてしまっていたのである。この神話の影響は絶大であったと言えよう。たとえば、プロソディの大家ジョージ・セズブリ（George Sainsbury）は、第二巻にみられるこの叙事詩最初の脚韻（light, flight）を取り上げ、“the very curious slipped rhyme” (II, 241) と述べる。つまり、この脚韻はミルトンの意図ではなく、誤り（slipped）に過ぎないと切り捨てられる。このセズブリの指摘に触発され、『楽園喪失』のテキストを調べ、あろうことか、脚韻を17か所も見つけてしまったディーコフもまた戸惑いを表明する<sup>10</sup>。

If those were all the rhymes, we might be willing to call them “carelessness,” though unready to believe that the poet did not know they were there. (Diekhoff, 539-40)

これらの脚韻はミルトンの「過失」（carelessness）であってほしいという願いは、まさに「脚韻からの解放者」としてのミルトン像が生み出した神話の影響下にある。しかし、ディーコフが譲歩節で示唆するように、これほど多くの脚韻にミルトンが気づいていなかったとは考えにくい。確かにミルトンはブランク・ヴァースを採用するにあたり、その正当性を強調するため、韻文論で過剰なまでに脚韻を攻撃している。しかし、この詩において、脚韻という装置が完全に廃されたわけではないのではないか。我々は、ミルトンの韻文論の言葉と、それに基づくミ

ルトン像の呪縛から自由にならねばならない<sup>11</sup>。

1667年のテキストに戻り、韻文論の呪縛が解けると、この詩の中で、いかにミルトンが音の反復、その反復による囲い込みの効果を有効に使っているかに改めて気づかされる。そもそもこの詩の源泉である聖書の言葉に繰り返しが多い。ミルトンは、これを積極的に利用している。たとえば、第三巻の神の言葉は、天国と地獄との応酬、そして天の勝利を、巧みな反復で表現する。

So Heav'nly love shal outdoo Hellish hate,  
Giving to death, and dying to redeeme,  
So dearly to redeem what Hellish hate  
So easily destroy'd and still destroys  
In those who, when they may, accept not grace. (III, 298-302)

ここはもちろん、ヒロイック・カプレットではないが、音の反復による効果は、それと同じ、もしくはそれ以上と言えるだろう。先に挙げたクリーザの議論を援用するならば、ミルトンはこの詩において、人間の自由意志を認めつつも、神の道が「偶然」(chance)ではなく「運命」(destiny)であることを強調する。そのために、ミルトンは、脚韻を含む音の反復を、排除するのではなく、むしろ自由自在に利用しているのである。

この詩におけるすべての脚韻を検証する紙幅は本論にはない。確かにセンズブリが言うように不注意としか思えないところもある。しかし、先の四巻からの引用は、圓月勝博が指摘するように、アブディエルの天使軍への帰還を唄い、「たった一人」で彼が戻ってきた偉業を、行末に“one”を繰り返し配置することで強調していることは明らかである<sup>12</sup>。このように、原則として無韻の『樂園喪失』において、敢えて行末の音が繰り返される箇所には、なんらかの意図が込められている可能性を検証する必要がある。

## eat / seat の問題

本論が目指すのは、語形変化によって最近の標準的エディションから抹消された脚韻である。その脚韻はまさにイヴが禁断の果実を口に、世界に変容が生じるその瞬間にあらわれる。まずは近代的エディションの代表としてファウラーによるテキストから引用したい。

So saying, her rash hand in evil hour  
Forth reaching to the fruit, she plucked, she ate:  
Earth felt the wound, and nature from her seat  
Sighing through all her works gave signs of woe,  
That all was lost. (IX, 780-4)

“She pluck'd, she ate”における単音節の連続と、接続詞省略 (asyndeton) はイヴの性急さを音声的に表現する<sup>13</sup>。また新井明が指摘するように、イヴが禁断の実を食べた後、「長母音・重母

音を基調とするゆったりとした詩行のなかに、沈うつな調子のw音が、ヘビの発話を感じさせるs音とまざりながら、何回か繰り返される。読者（聴者）はことばの意味からばかりでなく、いやそれ以上に言葉のもつ音楽的効果によって、『万物失われたり』の感をふかめる」（149）。そして、音の効果が特に綿密に計算されているこの一節が、初版では次のようになっているのである。

So saying, her rash hand in evil hour  
Forth reaching to the Fruit, she pluck'd, she eat:  
Earth felt the wound, and Nature from her seat  
Sighing through all her Works gave signs of woe,  
That all was lost.

(VIII, 780-4)

初版に立ち返り、ミルトン韻文論の呪縛から解放された我々は、原罪の瞬間にあらわれるこの“eat”と“seat”の脚韻に気づき、途方に暮れる。よりによって、なぜミルトンはこの重大な局面に脚韻を配置しているのか。しかも“eat”と“seat”は、言うまでもなく、この叙事詩における最重要語のうちの一つである。たとえば、エミリー・E・シュタイツァ（Emily E. Steizer）は、この叙事詩で展開される「食べることに関する哲学」を指摘している。七つの大罪で、「傲慢」（Pride）が第一の罪とされたのは、グレゴリウス一世（Gregorius I, c.540-604）以降のことで、それ以前は「貪欲」（Gluttony）が第一の罪であり、その考え方は初期近代にも残っていたという。シュタイツァは、ミルトンの詩句とガウワ（John Gower, c.1330-1408）の詩句とを比較しつつ、『樂園喪失』を食欲の制御、すなわち節制と、それによる救済の可能性を示す物語として読み換えている。また“seat”は、この叙事詩で何度も使われ、樂園などのさまざまな「場所」を表わすが、そこにはミルトンの政治的理想である議会政治の「議席」という意味も込められている<sup>14</sup>。

まず考えたいのは、この脚韻が書記生による誤り、あるいは植字工による組み字ミスではないかという可能性である。しかし、それはありえない。周知のように十七世紀においては“eat”の過去形には“ate”だけでなく、いくつかのヴァリエントがあり、そのうちの一つに“eat”があった。この現在形と過去形が同じでわかりにくい動詞変化は、OEDによると十九世紀まで使われていたようだが、二十世紀に入ると注釈者たちを戸惑わせ始める。たとえばA・W・ヴェリテイ（Verity）は、この箇所について「“eat”の過去形で、シェイクスピアにはよく見られる」という註をつけている。またミルトンの詩作品のコンコーダンスを調べてみると、ミルトンは“eat”の過去形に“ate”を使わず、後述するように、この箇所も含め、三度“eat”の形を使っている<sup>15</sup>。つまり、この詩句で使われる“eat”は、現在では使われなくなった過去形のヴァリエントであり、誤植ではない。

ただ、ことはそんなに単純ではない。十七世紀においては、どうも“eat”の動詞変化は不安定なままであり、書き言葉においては過去形の使用が避けられていた嫌いさえある。たとえば、欽定訳聖書でこの叙事詩と同じ場面を見てみよう。

...she took of the fruit thereof, and did eat, and gave also unto her husband with her; and

he did eat.

(Genesis, III. 6)

このように“did”を使うことによって過去形の使用が回避されているのである。ここは、重要な場面なので強調のために“did”が使われているだけではないかと反論されるかもしれない。しかし、聖書で600回ほど使われる“eat”を調べてみると、その中で過去を表わすものは108回あり、そのうち105回は“did eat”もしくは“didst eat”の形が用いられている。この圧倒的な偏りは、意図的に過去形の使用が避けられていたことを示唆している。しかも、この意図を裏切るように三度だけ聖書にあらわれる“eat”の過去形は、ミルトンが用いた“eat”ではなく、すべて“ate”なのである。三つのうち一つだけ引用すると、

And I took the little book out of the angel's hand, and ate it up; (Revelation, X. 10)

この極端に偏った用法から見えてくるのは“eat”の過去形が当時、まだ不安定であり、書き言葉としては標準化されていなかったという仮説である。

ここで興味深いのは、1620年代半ば頃に執筆され、1640年に死後出版されたベン・ジョンソン (Ben Jonson, 1572-1637) の『英文法』(*The English Grammar*) である。ジョンソンは英国土着の動詞の変化 (Conjugation) が不規則であることを嘆き、半ば強引に四種類に大別する。そして、母音変化が起こる第二変化の代表例として“leade-ledde-ledde”の変化をあげ、“ea”は短い“e”になると説明する。そして、その類例としてあげられる動詞の中に“eat”が含まれている。

Such are the verbs *eat, beate* (both making participles past, besides *ette* and *bette, eaten* and *beaten*), *spread, shead, dreade, sweate, shreade, treade*. (371)

つまりジョンソンによると、“eat”は“eat-ette-ette”もしくは“eat-ette-eaten”と変化していたことになる。しかしながら、彼の劇や詩の用語を確認していくと、むしろ“eat-eate-eate”と変化させているのである。

...they eate bread, & drunke water.

(*Volpone* [1607], II. ii.)

...Having well eate and drunke...

(*The Art of Poetry* [1640], 317)

このように形や音が定まらない状況は、正綴学 (Orthography) を専門とする人々を苛立たせていたに違はなく、事実、十七世紀半ばに活躍した正綴学者リチャード・ホッジズ (Richard Hodges) は、ジョンソンの英文法書のわずか三年後に出版した『正綴の手引き』(*A Special Help to Orthography*) に

I eat my meat today better than I ate it yesterday.

(4)

というなかば強引な例文を示し、過去形には“ate”を使うことを提唱している。

そもそも、なぜこんな事態になっていたのか。中野俊夫によると、中世英語の長母音 /ɛ:/ は

大母音推移の影響を特殊な形で被り /e:/ と /ei/ とに分かれたという (185)。さらに前者は初期近代において /e/ と短くなるもの、/ɪ:/ に変化するものに分かれていく。このあたりの事情は、今日の“ea”の綴りの読み方の多様性に反映している (beat, great, sweat など)。つまり、初期近代英国において“ea”の発音は、未分化状態であり、これを受け、“eat”の過去形は、/e:t/ とそのまま発音するか、/ert/ と変化させて発音するか、/et/ と短くして発音するか、三通り存在したのである。この発音変化の多様性を反映して、それぞれ“eat”、“ate”、“ette”という綴りが混在する事態になったのである<sup>16</sup>。

この“ea”という綴りの発音の未分化状態は、当時の脚韻にも見てとれる。エドワード・フィリップスはミルトンの甥ということで、ラテン語や英語辞書の作成で広く知られているが、1658年に恋愛指南書『愛と雄弁の神秘』(*The Mysteries of Love and Eloquence*) を出版している。その巻末には、クランボ (Crambo) と呼ばれる、男女で韻を探して楽しむ遊戯のために、脚韻辞書がつけられている (193-221)。その辞書によると、“eat”と韻を踏むものとして、“great”や“sweat”や“threat”なども挙げられている。またさらに事情を複雑にするものとして、ジョンソンの詩句に以下のような脚韻もあらわれる。

Fat, aged carps, that runne into thy net.  
And pikes, now weary their owne kinde to eat... (To Penshurst [1616], 33-34)

今から見ると気持ち悪いこの脚韻は、ミルトン自身、『詩篇』八十番の翻訳で使っている。

Thou feed'st them with the bread of tears,  
Their bread with tears they eat,  
And mak'st them \*largely drink the tears \*Shalish  
Wherewith their cheeks are wet. (Psalms LXXX [1648/1673], 21-24)<sup>17</sup>

J・M・パーセル (Purcell) は、ディーコフの論を是正する文章で、この詩句を根拠に、我々が問題にしている箇所は目韻 (eye-rime) に過ぎないと主張する。

However, the rime “eat-seat” (IX, 781-2) is probably only an eye-rime since “eat” was used in the past tense and often pronounced “ēt” from the 17th century on. (171)

しかし詩篇翻訳における“eat”は明らかに現在形であり、これは根拠にならない。むしろ、ここからわかるのは“eat”の綴りは、時制に関係なく、かなり自由に発音されていたということである。これを受け、メリット・Y・ヒューズ (Merrit Hughes) は、自身のエディションのこの箇所に、「おそらくこの過去形の“eat”は“seat”と韻を踏んでいた」(396)と註をつけている。また、エドワード・ル・コンテ (Edward Le Comte) は、さらに踏み込み、この過去形の“eat”は、「ミルトンの時代には“ate”と発音され、次の行の“seat”と韻を踏んでいた」(234)と断言する。ただし、近代英文法の大家、オットー・イエスベルセン (Otto Jespersen) は、ミルトンの「ラレグロ」(“L'Allegro”)の以下の脚韻



With stories told of many a feat,  
How *Faery Mab* the junkets eat, (‘L’Allegro’, 101-2)

を根拠に、ミルトンが過去形の“eat”を /e:t/ と発音していた可能性を示唆する<sup>18</sup>。ここまでの議論をまとめると、イヴ原罪の場面で使われる“eat-seat”は、実際の発音は確定できないが、少なくとも押韻する詩に置かれれば、脚韻とみなされるだけの音価はもっていたということになるだろう。

それでは、この脚韻は意図的なものだろうか。それとも単なる偶然であろうか。この箇所との比較で墮罪後の楽園に神子が現れ、アダムとイヴが弁明する場面を見てみよう。

Shee gave me of the Tree, and I did eate. (IX, 143)  
The Serpent me beguil’d and I did eate. (IX, 162)

アダムもイヴも呼応するように、自らの罪を“did eate”と聖書の用法を使って表現している<sup>19</sup>。この詩の中で、“eat”という語を使って過去の行為を表しているのは、この3か所だけであり、過去形の“eat”は、問題の箇所には使われていない。他にも日本語で「食べた」に相当する表現はあるが、そこでは別の言葉が使われている。第五巻でアダムとイヴがラファエルを迎えて食事をする場面は、

So down they sat,  
And to thir viands fell... (V, 433-434)

と“fall to”の過去形が使われている。また、さらに示唆的なのは、サタンに仕掛けられた夢の中で、イヴの前にあらわれる“One shap’d & wind’d like one of those from Heav’n”の描写である。その者はあることか、禁じられた智慧の木の前にイヴを誘い、彼女の目の前で、その木の実をもちで、食べたのである。

This said he paus’d not, but with ventrous Arme  
He pluckt, he tasted... (V, 64-65)

ここは、その構文からして明らかに、イヴの墮罪の場面と呼応している<sup>20</sup>。これらすべてを考慮に入れると、イヴの墮罪の場面で、ミルトンが過去形の“eat”を用い、それを“seat”と韻を踏む形で配しているのはやはり意図的としか思えない<sup>21</sup>。

## この「脚韻」の意図

では、その意図は何なのだろうか。不確定な発音を前提に、整理しつつ考えてみたい。まず、この“eat”と“seat”とが完全な脚韻として配置されているのだとしたら、ブランク・ヴァースの規則を違反することで、イヴが犯した罪、マイケルの言葉を借りるのであれば、「原初となる過

ち」(“the original lapse”, X 974)の重大さをメタレベルで表現していると考えられる。イヴが原罪を犯した瞬間、ミルトンが韻律論で使う言葉が示唆するように、我々は「束縛」(“bondage”)を課されるのである。次に、この配列が、目韻として意図されている可能性もある。であるとすれば、ミルトンは、読者を惑わしているのだろう。スタンレイ・フィッシュ(Stanley Fish)の議論を援用するなら、読者は、ここの“eat”を“seat”と韻を踏む形で読んでしまうことで、イヴと同時に「言い間違い」(the lapse of the tongue)をおかすことになる。そして、その罪にはっとさせられるのである。あるいは、敢えて不安定な脚韻をミルトンが配置した可能性もある。イヴの犯す罪に起因する我々の原罪は、「脚韻」の形をとることで、神の定め(destiny)として配置される。しかし、その脚韻／定めは絶対的なものではない。我々読者はそれを発音する際に、脚韻を回避できる可能性、その定めから自由になる可能性も残される。

### 綴りの近代化？

このようにイヴが禁断の実を食べる瞬間の「脚韻」には、さまざまな解釈の可能性が秘められている。しかしながら、すでに述べたように二十世紀末以降の標準的エディションは、この“eat”の綴りを“ate”に書き換えることで、この「脚韻」を『楽園喪失』のテキストから奪い去っている。最後に、この編集にも『楽園喪失』に脚韻はあってはならないという神話が影響していることを指摘し、本論を閉じたい。ミルトンは、『楽園喪失』の執筆後、過去形の“eat”を『楽園回復』(Paradise Regained, 1671)の中でもう一度用いている。

In the mount

Moses was forty days, nor eat nor drank ;

I, 351-352

もし『楽園喪失』の“eat”が、綴りの近代化という編集方針に沿って“ate”に書き換えられるのだとすれば、この箇所も“ate”にされるはずである。しかしながら、ここでは初版の綴りがそのまま採用されているのである<sup>22</sup>。この綴りの近代化における恣意的態度は、現在の『楽園喪失』のテキストが、ミルトンの韻律論の強い呪縛のもとにあることを露呈する。その呪縛から解放された我々の仕事は、『楽園喪失』初版に戻り、改めてその「ブランク」・ヴァースと向き合うことである。今までほとんど論じられることのなかった、『楽園喪失』の脚韻には、脚韻詩で用いられる脚韻よりも絶大な効果が秘められているのではないだろうか。その全貌の解明は今後の課題としたい。

## 註

- 1 本論は青山学院大学青山キャンパスで開催された日本ミルトン協会第10回研究大会（2019年12月7日）で発表した原稿を書き改めたものである。
- 2 ベントレイ編集の『楽園喪失』は、現代では編者による改竄が多いことで悪名高いテキストである。
- 3 スウィフトはこの叙事詩の書き換えについて、ベントレイ宛の書簡という形式で以下のように説明する。

*I am overjoy'd to hear that a very ingenious Youth of this City, is now upon the useful Design (for which he is never enough to be commended), of bestowing Rime on Milton's Paradise Lost, which will make the Poem, (in that only defective), more Heroic and Sonorous than it has hitherto been... (Swift, 27)*

ここで言及されるダブリンの若者が誰かについてはよくわかっていない。スウィフトによる自作自演の可能性もある。

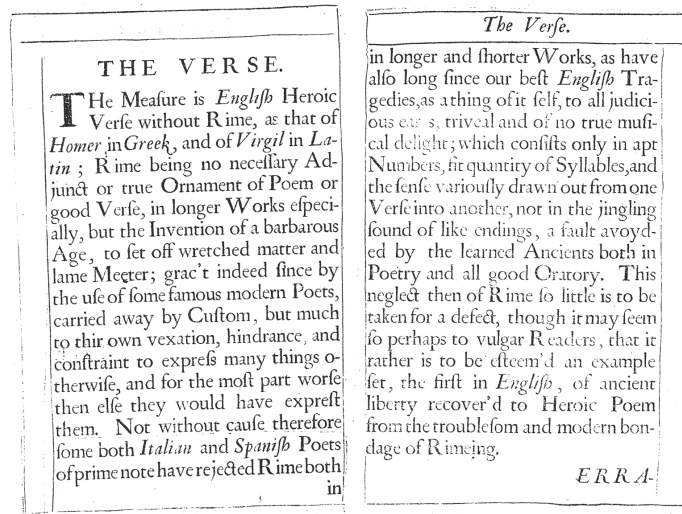
- 4 新書誌学 (New Bibliography) は、二十世紀前半に活躍したポラード (Alfred W. Pollard, 1859-1944)、マッケロウ (McKerrow, 1872-1940)、グレッグ (W. W. Greg, 1875-1959) を中心とする文献学グループで、印刷過程で生じる不純物を排除することで、「作者のテキスト」を復元できると考えた。
- 5 ドブランスキの“Editing Milton: The Case Against Milton”を参照。また2007年に出版された初版の校訂本の編集者のひとりであるジョン・ショウクロス (John Shawcross) はミルトンのテキストへの拘りを、肛門愛 (anality) の兆候であると指摘し、やはりミルトン存命中のテキストにみられる綴り字に再注目する (*John Milton: The Self and the World*, 187-8)。
- 6 『楽園喪失』初版には異なる表紙が六種類確認されており、最初の三つには印刷者であるシモンズの名前は銘記されていない。また二つ目の表紙では作者であるジョン・ミルトンを示す活字が最初のものよりもかなり小さくなり、三つ目の表紙では J. M. とイニシャル表記になってしまう。この辺りの事情には、国王殺しのミルトンの詩をなんとか売ろうとする印刷者シモンズの苦悩が見てとれる。しかし、1668年の四つ目の表紙以降、突如、シモンズはミルトンの名前を復活させ、自分の名前も印刷者として表記するようになる。本文の前に「印刷者から読者へ」(The Printer to The Reader)、ミルトンによる巻ごとの「梗概」(The Argument) と「韻律論」(The Verse) と正誤表 (Errata) が追加されたのは、このヴァージョン以降である。
- 7 ディーコフが指摘している脚韻は、初版のテキストで以下の17か所である。

II. 220-1, light, fligh	III. 544-5, gone, drawne	IV. 24-5, memorie, be
IV. 26-7, ensue, view	IV. 204-5, use, views	IV. 956-7, supream, seem
V. 274-5, flies, Paradise	VI. 34-5, beare, care	VI. 709-10, right, might
VI. 792-3, sight, highth	VIII. 105-6, seems, beams	VIII. 225-6, unearned, returned
VIII. 477-8, destroy, joy	VIII. 781-2, eat, seat	X. 230-1, Gate, Potentate
X. 593-4, express'd, blest	X. 666-7, thence, violence	

ディーコフは五巻の flies/Paradise の韻に関しては不完全かもしれないと述べる。また sight/highth が韻であるならば、この他にも II. 893-4, highth, Night がある。パーセル (J. M. Purcell) はディーコフのリストを批判しつつ、VIII. 175-6, despite, Favorite と IX. 544-5, punishment, meant も脚韻であると指摘する。

- 8 同語反復による脚韻は、初版のテキストで以下の17か所である。
- |                   |                              |                         |
|-------------------|------------------------------|-------------------------|
| I. 296-7, steps   | III. 3-4, light              | III. 67-8, love         |
| III. 190-1, due   | IV. 20-1, Hell               | IV. 372-3, foe          |
| V. 471-2, all     | VI. 23-4, one                | VI. 541-2, each         |
| VI. 734-5, on     | VII. 181-2, will             | VII. 284-5, appeer      |
| VII. 369-70, seen | VIII. 328-9, esteem, esteeme | VIII. 697-8, Evil, evil |
| IX. 361-2, felt   | X. 1095-6, Fire              |                         |
- 9 『楽園喪失』からの引用は、特に断わらない限り、すべて Shawcross と Lieb の編集による初版のテキストから行う。

- 10 ディーコフはヒロイック・カブレットだけでなく、この詩に見られる一行跨ぎ韻や行間中止 (caesura) における韻も数多く指摘する。
- 11 1668年に追加されたミルトンの韻文論は、見開き2頁にちょうど収まるように、他の箇所よりも活字の大きさがかなり大きくなっている (下図参照)。キャッチワードの“ERRA”は次の頁に同じく追加された正誤表 (Errata) を指しているが、この韻文論の言葉がその後に発揮することになる、ある種の「呪詛的力」を象徴する。“ERRA”は、ラテン語で「道を踏み外せ、誤りをおかせ」という意味の命令文になる。



- 12 *MCJ News* 29号所載の“Playing back the Miltonic One-Man Band: From *Milton and His Age* and *Singular Rebellion*”を参照。
- 13 著者の師匠である藤井治彦がここに引用した詩句とその音の効果を好んでいたことについては拙論「she eat」を参照されたい。
- 14 “seat”の『楽園喪失』における意義については、拙論「椅子の個人主義」を参照されたい。
- 15 ミルトンの散文については、すべて調べ切ったわけではないが、『英国史』(*The History of Britain*)の中で、やはり過去形の“eat”を用いている (“The Monks went clad in fine stuffs, and made no difference what they eat”, 307)。また『離婚論』(*The Doctrine and Discipline of Divorce*)では“did eat”の形を使う (“David enter into the house of God and did eat the Shew bread”, 43)。
- 16 このあたりの事情は、“ea”を含む動詞変化の複雑さにも影響している。
- |                    |  |
|--------------------|--|
| 音が短くなり、綴りが維持されるもの  | read / read                              |
| 音が短くなり、綴りが変化するもの   | lead / led                               |
| 音の変化がないもの          | beat / beat                              |
| /ei/に変化し、綴りも変化するもの | break / brake (“brake”の形は、欽定訳聖書によく見られる。) |
- 17 1673年版に追加された詩篇翻訳のうち、ここに引用したものを含め、1648年に執筆された九篇 (80-88) については、ヘブライ語原文がなく、ミルトンが翻訳の際に付け足した部分についてはイタリック体で示され、なおかつ「\*」の記号を利用して、もとのヘブライ語の注釈を入れている。このあたりの事情も、ミルトンが当時の出版文化に知悉していたことを示す証拠とされる。なお『楽園喪失』以外のミルトンの詩については、すべて1673年版詩集から引用する。
- 18 イェスバルセンは残念ながら、『楽園喪失』のこの箇所には言及していない。“In early ModE, eat was the more common prt form (Sh and Mi have only eat), but then this spelling may have represented a long or a short vowel. Milton has eat riming with feat: L'Allegro 102. Ate is the only form in AV.” (69) (引用中の

“prt”は“preterite”の略)。興味深いことに、欽定聖書で“ate”が使われている場面をジュネーヴ聖書(1560)で確認してみると、そこも“ate”が使われている。

- 19 『楽園喪失』ではこの2か所を含めて、“eat”のレンマ(lemma)形(原形、命令形、二人称単数と三人称単数を除く現在形)が23か所使われているが、そのうち17か所で語尾に“e”が付いた“eate”の綴りが用いられている。語尾の“e”の有無については、ドブランスキによると植字工の裁量によるところが大きかった。しかし、この偏り具合から考えると、ミルトンが過去形の“eat”と区別するために、現在形や原形の場合に“eate”を使っていた可能性も否定できない。だとすると発音が区別されていた可能性も残る。
- 20 グリーンブラット(Stephen Greenblatt)は『楽園喪失』によって、アダムとイヴはようやく“real”(230)になったという。この局面で、ミルトンが高雅な響きをもつ“tasted”ではなく、聖書の“did eat”でもなく、口語的な“eat”を利用しているのも、「リアル」だと言えよう。興味深いことに、口語的表現を詩の中に持ち込んだジョン・ダン(John Donne, 1572-1631)の、イヴが食べた林檎の輪廻転生を描く奇想詩に付された書簡にも、“when shee was that apple which Eve eate”と過去形の“eate”が使われている。
- 21 また1668年版に追加されたErrataには、第二巻881行の“great”を“grate”に訂正するよう指示がある。これは、ミルトンが“ea”という綴りのもつ音価に拘りをもっていた証拠と考えることができる。
- 22 「ラレグロ」の箇所も同様に初版の綴りが採用されているが、そこは“ate”に書き換えると脚韻がわかりにくくなるという言い訳も立つ。ミルトンは詩作品の中で、三度過去形の“eat”を使っている。ロングマン版の場合、『楽園喪失』以外の詩はジョン・ケアリ(John Carey)が編集しており、編集者が異なるのでまだ理解できるが、ステイーヴン・オーゲル(Stephen Orgel)とジョナサン・ゴールドバーグ(Jonathan Goldberg)が共同編集するオクスフォード版、ゴードン・キャンベル(Gordon Campbell)編集のエヴリマン版がともに、『楽園喪失』の“eat”だけを“ate”に書き換えているのは、やはり恣意的と言わざるをえない。

## 参考文献

- 新井明『ミルトン—人と思想』清水書院, 1997.
- Bentley, Richard. *Milton's Paradise Lost. A New Edition*. Jacob Tonson et al., 1732.
- Bradshaw, John. *A Concordance to the Poetical Works of John Milton*. (1894) Longwood Press, 1977.
- Campbell, Gordon. (ed.) *John Milton: The Complete English Poems*. Everyman's Library, 1992.
- Carey, John and Alastair Fowler. (eds.) *The Poems of John Milton*. Longman, 1968.
- Creaser, John. “Verse and rhyme”. *Milton in Context*. Ed. Stephen Dobranski. Cambridge University Press, 2010.
- Darbishire, Helen. *The Poetical Works of John Milton. 2 vols*. Clarendon Press, 1952-55.
- Diekhoff, John. “Rhyme in Paradise Lost”. *PMLA*, Vol. 49, No. 2, 1934.
- Dobranski, Stephen. “Editing Milton: The Case Against Modernization”. *The Oxford Handbook of Milton*. Ed. Nicholas McDowell and Nigel Smith. Oxford University Press, 2008.
- Dobranski, Stephen. *Milton, Authorship, and the Book Trade*. Cambridge University Press, 1999.
- D(onne), J(hon). *Poems, with Elegies on the Authors Death*. John Marriot, 1633.
- Engetsu, Katsuhiko. “Playing back the Miltonic One-Man Band: From *Milton and His Age* and *Singular Rebellion*”. *MCJ News*, Vol. 29, 2008.
- Fish, Stanley. *Surprised By Sin* (2nd Edition). Harvard University Press, 1997.
- Greenblatt, Stephen. *The Rise and Fall of Adam and Eve: The Story That Created Us*. Vintage, 2018.
- Hodges, Richard. *A Special Help to Orthography*. Richard Cotes, 1643.
- Hughes, Merrit. (ed.) *John Milton: Complete Poems and Major Prose*. Hackett Publishing Company Inc., 1957.
- Jespersen, Otto. *A Modern English Grammar on Historical Principles. Part VI: Morphology*. (1956) George Allen & Unwid Ltd., 1961.

- Jonson, Ben. (trans.) *Q. Horatius Flaccus: His Art of Poetry*. John Benson, 1640.
- Jonson, Ben. *The English Grammar*. (1640) Ed. Derek Britton. *The Cambridge Edition of the Works of Ben Jonson*, vol. 7. Ed. David Bevington, Martin Butler, and Ian Donaldson. Cambridge University Press, 2012.
- Jonson, Ben. *The Workes of Beniamin Ionson*. W. Stansby, 1616.
- Jonson, Ben. *Volpone or the Foxe*. Thomas Thorppe, 1607.
- 川島伸博『『椅子』の個人主義—『楽園喪失』における椅子の表象とその論理—』『藤井治彦先生退官記念論文集』藤井治彦先生退官記念論文集刊行会編 英宝社, 1999.
- 川島伸博「she eat—藤井治彦先生を思いだしながら—」*Osaka Literary Review*, No. 57, 2018.
- Le Comte, Edward. (ed.) *John Milton: Paradise Lost and Other Poems*. Signet Classics, 1961.
- Lieb, Michael and John T. Shawcross. (eds.) *“Paradise Lost: A Poem Written in Ten Books”: Essays on the 1667 First Edition*. Duquesne University Press, 2007.
- Milton, John. *Paradise Lost. A Poem Written in Ten Books*. (S. Simmons), 1667.
- Milton, John. *Paradise Lost. A Poem Written in Ten Books*. S. Simmons, 1668.
- Milton, John. *Paradise Regained. A Poem in IV Books. To which is added Samson Agonistes*. John Starkey, 1671.
- Milton, John. *Poems, &c. Upon Several Occasions*. Tho. Dring, 1673.
- Milton, John. *The Doctrine and Discipline of Divorce* (Revised Edition). 1644.
- Milton, John. *The History of Britain, That Part Especially Now Call'd England*. James Allestry, 1670.
- 中野俊夫『英語学体系11 音韻史』大修館書店, 1985.
- 小野功生「王政復古期出版文化とミルトン」『ミルトンと十七世紀イギリスの言説圏』彩流社, 2009.
- Orgel, Stephen and Jonathan Goldberg. (eds.) *John Milton (The Oxford Authors)*. Oxford University Press, 1991.
- Phillips, Edward. *Mysteries of Love and Eloquence*. N. Brooks, 1658.
- Phillips, Edward. “The Life of Mr. John Milton”. *Letters of State by Mr. John Milton, To most of the Sovereign Princes and Republicks of EUROPE*. 1694.
- Purcell, J. M. “Rime in Paradise Lost”. *Modern Language Notes*, Vol. 59, No.3, 1944.
- Sainsbury, George. *History of English Prosody, Vol. II: From Shakespeare to Crabbe*. (1908) Russell & Russell, 1961.
- Shawcross, John T. *John Milton: The Self and The World*. The University Press of Kentucky, 1993.
- Shawcross, John T. and Michael Lieb. (ed.) *“Paradise Lost: A Poem Written in Ten Books”: An Authoritative Text of the 1667 First Edition*. Duquesne University Press, 2007.
- Steizer, Emily E. *Gluttony and Gratitude: Milton's Philosophy of Eating*. The Pennsylvania State University Press, 2017.
- Swift, Jonathan. “Milton Restor'd and Bentley Depos'd”, Nomb. 1. E. Curll, 1732.
- The Holy Bible. An Exact Reprint in Roman Type, Page for Page of the Authorized Version Published in the Year 1611*. Oxford University Press, 1985.
- Verity, A. W. (ed.) *Milton: Paradise Lost*. Cambridge University Press, 1921.